

# 会計記号の格関係にかんする一試論

大西新吾

(2017年12月27日受理)

## A Tentative Study of the Semiotic Shapes that Cases Take in the Field of Accounting.

Shingo ONISHI

要旨：会計は企業に関わる財（対象物）の動きを貨幣金額で測定あるいは評価し、その測定値（評価値）をもとに〈利益〉という値を算出する行為、すなわち一種の物理現象を描出するシステムととらえられている。その一方で、そうした見方と一部重なるかたちで、会計も言語と同様に一種の人文・社会現象を描出するシステム（コミュニケーションシステム）とみられることもできる。物理現象と人文・社会現象、その両方をみすえて、人間の認識の基底構造を探求するという立場から、会計を記号論的に考察することが可能である。本稿では、ある出来事を日本語で表現した場合と会計で記録した場合とを対照させながら、格というカテゴリーがつくる関係について考察し、12個の型の存在を仮定した。

Key words：格関係 場所 カテゴリー 仕訳文 文型

### 1. はじめに

会計はある企業の経済活動を記録し、計算し、報告（伝達）するための一連のシステムである、と一般に理解されている。会計報告書の主たるものとして貸借対照表と損益計算書がある。この二つの報告書は〈資産〉・〈負債〉・〈純資産〉・〈費用〉・〈収益〉という5つの概念分類を基礎に構成されている。そして企業の日々の経済活動を記録し計算するさいにも、この5つの概念分類を前提に記録や計算の仕方や仕組みが語られている。

企業が行った日々の経済行為を記録し、それを貸借対照表や損益計算書にまとめていくための方法として、複式簿記というものがある。複式簿記にしたがって記録するとは、教科書的にいうと、企業で生じる日々の出来事（これを「取引」という）をひとつの単位とし、先の5つの概念分類を前提とした一定のルール（これを「取引要素の結合関係」という）にしたがって記録する（これを「仕訳」とい

う）ことをさす。アリストテレスのカテゴリー論にならっていうなら、5つの概念が会計領域の最高類ということになる。こうした見方は、ある対象（客体）がありそれを観察する（主体）があつて、主体が客体を語るというデカルト以来の主客二元論の図式を前提にしている。つまり、会計は貨幣や商品といった財の動きを一種の物理現象ととらえ、これを貨幣金額という数値をもちいて測定し表現するシステムであるとする見方が一般的である。しかしその一方で、そうした見方と一部重なるかたちで、会計も言語と同様に一種の人文・社会現象を描出するシステム（コミュニケーションシステム）であるとみられることも可能である。

本稿では、物理現象と人文・社会現象、その両方をみすえて、人間の認識の基底構造を探求するという立場から、会計現象を記号論的に考察する。小泉保博士は『日本語の格と文型』の中で日本語の格について検討されたが、これを手がかりとして、ある

出来事を日本語で表現した場合と会計で記録した場合とを対照させながら、格というカテゴリーがつくる関係について若干の考察を試みる。

## 2. 格とは

泉井久之助博士は格について次のように言う。「名詞、または名詞的な要素の機能するところには、たとい潜在的にも、格の現象があらわれないことはない。格はその機能の範疇である。顕在的な形によってあらわされると否とは、格の本質に関与する第一義的な事柄ではない。」(泉井、55頁)「性の区別は名詞の機能に本質的なものではない。同様のことは「数」についてもいうことができる。」(56頁)「しかし格の関係を忘れて名詞は文に機能することはできない。その際の格は、有形と無形とを問わないのである。……格は名詞と文の相関性の範疇である。……格を知らない言語はない。」(58頁)「しかし格の一般的な定義はむずかしい。」(59頁)「格の関係自体は格の表とは別である。同時に格助詞の数にも拘束されるべきものでもない。」(62頁)

小泉保博士によれば、「格は、ある文を形成するために述語が必要とする名詞項とその述語との間の関係を示す形式的要素」(小泉、66頁)である。「日本語の格は格助詞によって表され」(69頁)、その目録として「ハ・ガ・ヲ・ニ・カラ・ヘ・デ・ト・ヨリ・マデ・ノ」の11個の格助詞を提出された(72頁)。

小泉博士は、『日本語の格と文型』を考察される中で、空間知覚の場所格の図式が文法格に投影している(83頁)ととらえている。そのうえで、「位置、起点、着点」の場所的トリオ、あるいは「位置、起点、着点、経路」の場所的4項セットという空間知覚の図式を格体系のベースにすえて(79頁)、日本語の格の一覧を表にまとめられた(85-87頁)。

格の厳密な定義は言語学者に譲るとして、格は、基本的には名詞に関わる文法カテゴリーとされる。イエルクスレウはこの格という文法カテゴリーを、伝統的に「場所論者」とよばれる文法学者の立場に立って、空間的な関係を表すカテゴリーとした(立川(1995a)、103-104頁)。

格とは2つの対象間の関係を表現するカテゴリーである。

たとえば「当社はA社に商品を売った。」と言うとき、「当社は」が主格で「A社に」が与格にあたる。この格が「当社」と「A社」の空間的な関係性を表しているとみるわけである。「商品を」という対格も考慮に入れると、2つの対象間の空間関係はより複雑になる。)イエルクスレウはこの空間の関係を「近接性・静止性・離去性」という3つの項を立てて定式化している。これは人間が空間をどう把握(知覚)してそれを言語的にどう表現するかに依拠している。イエルクスレウはこの人間の空間把握を1次元(方向性)・2次元(密着性・非密着性)・3次元(主観性・客観性)の各レベルでとらえている。3つのレベルの中で基本となるのは1次元レベルであり、2次元、3次元はこれをベースにしている。1次元のレベルは「方向性」であり、空間において動くものと動かないものをとらえ、動かないものは「静止(ゼロ)」とみる。動くものについては、近づいてくるものを「近接(+）」、離れていくものを「離去(-)」とみる。そのうえで、人間がなにかについて発話するとき、それは空間知覚の現れであるとみるわけである。

空間知覚の表現は、知覚のひとまとまりごとに行われている。言語においてはこの<ひとまとまり>は「単文」として表現されている。したがって、ここでは、「格とは、人間の空間知覚が「単文」を単位として表出するさいの<意味の骨格>をなすもの」ととらえることにする。

## 3. 出来事と仕訳文

小泉保博士は『日本語の格と文型』の中で、言語表現について以下のように考えておられる。

「ある出来事や状態を伝えるのに、言語表現を用いるのが普通である。言語表現は、文という単位で組み立てられている。文を形成するためには、まず文の中核をなす述語を選定しなければならない。述語は、動詞のみならず、形容詞や名詞を述

語として使うことも可能である。述語が決定されると、その述語がもっているいくつかの文型の中から、その状況で表現するのにもっとも適切な文型が選出される。この文型に必要な行為項をほめこめば、基本的な文が形成されることになる。これに状況項や修飾語が付加されれば、文が完成する。……この文型に行為項が納まり、状況項や修飾語句が添付されて、まとまりのある受動文や使役文も成立する。……かくて、千変万化の言語表現が可能となるのである。」(297-298頁)

ここで小泉博士は日本語の述語を動詞述語、形容詞述語、名容詞述語、名詞述語の4種類ととらえたうえで、文を形成するために述語が必要とする名詞の数は多くて3つ（ごくまれに4つのこともあるが、副詞的要素を必要とする述語もある。）(69頁)とされる。また述語は、支配する名詞項の数により、名詞項をとらない無価述語、1つの名詞項をとる1価述語、2つの名詞項をとる2価述語、3つの項を求める3価述語に分け(69頁)ておられる。なおここで名詞項は「名詞+格助詞」の単位を表わしている。

小泉博士の格分析は、文を主語と述語に分解する方法に対して文の中核を述語とする文法構造を提出したテニエールの結合価(valence)の考え方に基づいている<sup>1)</sup>。そして、動詞に限らず、述語が支配する行為項の数、すなわち結合価とその性質により分類されたものが「文型」である(232頁)との見方をしめされている。

英文法を習い始めると、まず「主語」と「述語」という文法用語を教えこまれる。この主語と述語を文の中核とする見方は、周知のとおりアリストテレス論理学に源を発する西欧の文法家たちの伝統的思考法によるものである(小泉、109頁)。そうして主語と述語を区分してから、伝統文法は述語をさらに「動詞」と「目的語」に分解する。

「品詞」という枠組みの中に細分化された語彙群を振り分け(分類し)、そこから取り出した要素を結合して文をつくるという見方は、出来事を取引要素の結合関係として仕訳するという会計の表現方法

と類似している。企業の日々の経済活動上の出来事としての各取引は、ある一定のルールに従って、各分類から要素をとりだしその結合関係を示すことで、仕訳される。つまりここでの仕訳とは、出来事を諸要素に分解することであり、コト分けといえる。「取引要素の結合関係」は仕訳というコト分け表現のためのルールであり、「文型」というよりも「文法」といった方が良いのかもしれない。そのルールに従うと、取引とよばれる出来事は、借方と貸方という左右のスペースそれぞれに少なくとも1つの要素を配置することで表現される。

5つの概念分類から要素を1つとりだし、左右それぞれのスペースに配置して表現するということは、 $5 \times 5 = 25$ とおりの結合関係が考えられる。計算上はそうなるが、ほとんどの取引は8つの結合関係におさまるとして、以下のような結合関係が簿記や会計のテキストで紹介されている。

- ①<資産>の増加—<資産>の減少
- ②<資産>の増加—<負債>の増加
- ③<資産>の増加—<純資産>の増加
- ④<資産>の増加—<収益>の発生
- ⑤<負債>の減少—<資産>の減少
- ⑥<負債>の減少—<負債>の増加
- ⑦<費用>の発生—<資産>の減少
- ⑧<費用>の発生—<負債>の増加

以上①から⑧のどれかに、取引(出来事)をあてはめて仕訳し、記録・計算をすすめていくことで、貸借対照表や損益計算書が作成されるというわけである。たとえば、企業で営業用の自動車を購入し、代金として現金100万円を支払ったという取引があった場合、上記①にあてはめて、次のように仕訳される。

(借方)車両運搬具 1,000,000 (貸方)現金 1,000,000

この場合、「車両運搬具」や「現金」という用語は「勘定科目」とよばれ、<資産>という概念の一要素(項目)とみなされている。用語とともに金額(「勘定金額」という)を記載しているが、どの概念

に属する要素が左（借方）と右（貸方）の位置のいずれに記載されるかによって、金額の増加か減少かを表すことにもなっている。

上記のように、会計の記録方法としての簿記技術の説明にあたっては、最高類としての5つの概念分類のもとに、そこから抽出した要素を結合させ文をつくるという流れとなっている。このとらえかたの背後にはアリストテレスの文法観があるようにおもわれる。そこには、主語と述語の分解をベースにした主体（主観）と客体（客観）の対立という図式がある。（その背景にはユークリッド幾何学とニュートン力学およびデカルト的哲学観がある。）これに対し、これから考察していく格関係は、小泉博士の「文型」のとらえかたに近い。ここでは文を主語と述語にまず分解するという見方には立っていない。文の中核を述語とみて、その述語の展開によって文が形成されるとみる。そこには人間の空間知覚の図式がある。

以下では、ひとつのまとまり（人間の空間知覚の単位）の表現のひとつとして、会計記録の仕訳を「文」とみる。この「文」は「勘定科目」を項（＜名詞＋格＞）、「借方・貸方」を項にかかわる＜動詞＞に相当するものから構成される、とみる。そのうえで、項と項の＜あいだ＞の関係を探求する過程で、ある種の「文型」がみいだされることが期待される。その「文型」は伝統文法のような主語と述語から説明されるものではなく、格による項関係から整理されるものである。先述のとおり主語と述語というみかたは、主体（主観）と客体（客観）の対立という図式である。一方、格関係から文のかたちをとらえるというみかたは、西田幾多郎の無の論理、その根底にある場所のかんがえかたに通じている。あるいはまた、メルロ＝ポンティの人間の身体図式にたいすとらえかたに通じている。

#### 4. 会計記号の格関係

筆者は以前、会計においてある出来事（取引）を表現する仕訳記録を、ひとつの「単文」とみて、その単文を構成する「勘定科目」(項)の数が、2つか

ら6つ（ほとんどの場合2つから4つ）のあいだにおさまることを指摘した（大西、(2014)）。このときは、文を構成する項の数には制限があることを指摘するにとどまったが、格関係をみいだしていくという立場からすれば、考察を進めていくに際し、以下のようなことに留意する必要がある。

- 「勘定科目」は言語でいうところの「名詞」に相当するものとみるにとどめず、文中の働きという視点からすれば、単に「名詞」ではなく、「名詞＋格」あるいは「～格」ととらえ直して見る必要がある。
- ひとつの出来事（取引）を表す仕訳「文」は「勘定科目」と「勘定金額」と「日付」から成るが、「借方と貸方」という＜位置＞も表現に関係している。この「借方と貸方」が言語における「動詞」に相当するものとして考えることが可能である。
- 「勘定金額」は文の主題（トピック）とみて、「〇〇円について語ると……『～は～から～を～した。』』のように、単文『 』の外に置くことにする。
- 「日付」は副詞とみて、文の骨格に影響をあたえないものとして扱う。

会計記号の格関係を導き出す作業にあたり、3つの次元のベースとなる「方向性」の次元に限定して考察を進めよう。空間の知覚図式すなわち「近接性・静止性・離去性」の視点から、仕訳「文」の中における「勘定科目」間関係をみていこう。

泉井ら言語学者の言説から、格は「名詞＋格」のかたちで名詞に寄り添って（名詞を支えるかたちで）機能していると考えられる。

以下に、会計で記録される典型的な仕訳12個を、その出来事を表現する日本語の文章とともに挙げる。

①開業：(当社は) 現金¥100を元入れして営業を開始した。

仕訳文：(借方) 現金 100 (貸方) 資本金 100

②金銭の借り入れ：(当社は)(銀行から) 現金¥50

を借り入れた。

仕訳文：(借方) 現金 50 (貸方) 借入金 50

- ③商品の購入：(当社は)(A社から) 商品を仕入れ、その代金¥30は掛けとした。

仕訳文：(借方) 仕入 30 (貸方) 買掛金 30

- ④商品の販売：(当社は)(B社へ) 商品を販売し、その代金¥70は掛けとした。

仕訳文：(借方) 売掛金 70 (貸方) 売上 70

- ⑤給料の支払い：(当社は)(従業員に) 給料¥20を現金で支給した。

仕訳文：(借方) 給料 20 (貸方) 現金 20

- ⑥サービスの提供：(当社は)(C社から) 仲介手数料として現金¥80を受け取った。

仕訳文：(借方) 現金 80 (貸方) 受取手数料 80

- ⑦借入金の返済：(当社は)(銀行へ) 借入金¥50を利息¥5とともに現金で返済した。

仕訳文：(借方) 借入金 50 (貸方) 現金 55  
支払利息 5

- ⑧備品の購入：(当社は)(D社から) 応接セットを購入し、その代金¥60を月末に払うことにした。

仕訳文：(借方) 備品 60 (貸方) 未払金 60

- ⑨備品の減価償却：決算にあたり、備品について減価償却¥10をおこなった。

仕訳文：(借方) 減価償却費 10 (貸方) 備品 10

- ⑩為替手形の振り出し：(当社は)(P社への) 掛代金¥100を支払うに際し、(Q社の引き受けを得て) 為替手形を振り出した。

仕訳文：(借方) 買掛金 100 (貸方) 売掛金 100

- ⑪為替手形の引き受け：(当社は)(X社から) 掛代金の支払いとして為替手形¥100の引き受けを求められ、これを引き受けた。

仕訳文：(借方) 買掛金 100 (貸方) 支払手形 100

- ⑫為替手形の受け取り：(当社は)(Y社から) 掛代金¥100として、為替手形を受け取った。

仕訳文：(借方) 受取手形 100 (貸方) 売掛金 100

以上、12個の仕訳文についてみていくとまず、次のことに気づく。

- 日本語において動作を行う主体(行為者)すなわち言語でいう「主語」が、仕訳文では表現されていない。
- 同様に、自分を当事者(私)とした取引相手(他者)についても、仕訳文では表現されていない。
- 仕訳文では、科目(語彙)と金額と位置(借方と貸方)が表示されているが、いわゆる「動詞」は表面上現れていない。(対応する日本語の文章には当然ながら動詞はある。)この点については、先述のとおり「借方と貸方」が言語における「動詞」に相当するものとして考えることが可能である。さらに日本語の格助詞を意識して、例で挙げた仕訳文に対応する日本語をみると、次のことがみえてくる。
  - ひとつの出来事(取引)を表わしている日本語の文章を、「動詞」を意識すると2つの「単文」(1つの文に動詞は1つ)に分解できる。表面上は様々な行為が行われているように見えるが、それを表現する2つの単文の中の動詞は、一方は「受け取る」、もう一方は「渡す」という動詞に代替可能である<sup>2)</sup>。
  - 日本語の格助詞を意識して、その2つの単文を表記すると、
 

「一ハ 一カラ 一ヲ 一受け取った。」と「一ハ 一ヘ 一ヲ 一渡した。」となる。

 これを小泉博士のように動詞を中心にとらえると、「受け取った」のほうは、「一ハ」と「一カラ」と「一ヲ」の3つを項に持つ3価動詞となる。「渡した」のほうは、「一ハ」と「一ヘ」と「一ヲ」の3つを項に持つ3価動詞となる。
  - 「一ハ 一カラ 一ノ 一ヲ 一受け取った。」と「一ハ 一ヘ 一ノ 一ヲ 一渡した。」とみ

ることもできる。(たとえば「当社ハA社から100円ノ商品ヲ受け取った。」ことと「当社ハA社へ100円ノ現金を支払った。」ことのやりとり。)この場合「一ノ」は「一ヲ」にかかる属格とみると、これらの単文も3価動詞となる。

- 「一ハ 一カラ 一ヲ 一デ 一受け取った。」と「一ハ 一ヘ 一ヲ 一デ 一渡した。」とみることが出来る。(たとえば「当社ハA社から100円ヲ商品デ受け取った。」ことと「当社ハA社へ100円を現金デ渡した。」ことのやりとり。)この場合「一デ」は述語動詞「受け取った」に支配される1つの項とみると4価動詞の文とみることが出来る。
- 仕訳文は、日本語の立場からみると、それぞれ3価動詞(あるいは4価動詞)を単文とする2つの文を、1つの文(単文)として表現したものにみえる。そして、その表現にあたっては、「一ヲ」(あるいは「一デ」)に注目して、つまりその項だけを語彙化して、「勘定科目」で表現する。借方に1科目、貸方に1科目、合わせて2科目(要素)の結合として取引が表現される。
- この2要素間の関係が、格関係の考察につながっていく。

もう少し整理しながら具体的にみていこう。

仕訳文では、「受け取る」ことと「渡す」ことを一文で(同時に)表現している。つまり仕訳文は<交換>を表現している。言語(ここでは日本語)では、取引(出来事)を表現するにあたっては「受け取る」と「渡す」という2つの動詞は、2つの単文を必要とする。小泉氏の考察にしたがうなら、取引記録を表現するためには、2つの単文すなわち2つの3価動詞で $2 \times 3 = 6$ つの項を要求する。したがって、ひとつの出来事を言語で表現するためには6つの項を必要とする。(ここで動詞も文の1つの要素ととらえると、単文は3項(要素)+1要素=4要素から成ることになる。ここには主語と述語をまず区別するという思考はない。)一方、仕訳文では、一見すると「誰は(が)」や「誰から」・「誰へ」を表現する「勘定科目」、すなわち「人」を表現す

る「勘定科目」は見当たらない。「勘定科目」は「何を」に焦点をあて、仕訳文は何と何を交換した(する)か、ということ表現しているようにみえる。すなわち、取引とよばれる出来事が生まれるたびに、会計ではこれを仕訳文として記録し、これを「科目」ごとに設定された「勘定」とよばれる計算場所に「金額」を転記し、集計し、残高を求める。この「勘定」は<借方と貸方>の左右両側型式を有しており、一方が金額の増加、もう一方が金額の減少を示す欄であり、仕訳で借方に位置づけられた金額は当該「勘定」の借方に転記され、仕訳で貸方に位置づけられた金額はその「勘定」の貸方に転記される。こうして、金額の計算重視で会計をみれば、仕訳は不要で、直接、各「勘定」へ金額を記入していけばよいという見方もありうる。しかし、こうした見方であっても、「科目」はその金額の成立した場面を表現するために必要不可欠の項目であり、「科目」という項目なしに、取引を表現することはできない。こうした意味から、会計は言語に近接しているといえる。

では、以上のことをふまえて、会計記号の独自性は認めながらも、会計と言語の似ている面をてがかりに、格関係について考えをさらに進めていく。

借方側は「受け取る」ことを貸方側は「渡す」ことをしめす場所であり、ひとつの仕訳文は借方にも貸方にも必ず1科目以上を必要とする。借方だけ、あるいは貸方だけに科目を置いて文として成立しない。ここで重要なことは、「受け取る」は「近づく(近接性)」に、「渡す」は「離れる(離去性)」に対応しているという点である。その点を踏まえたうえで、「科目」という名詞は本来、「名詞+格」であり、各科目は背後の格関係に支配されているとみるならば、「勘定科目」間の関係は格関係の現れとみることが出来る。そうした見方からは、ある「勘定科目」は「何(を)」という対象物を指示する名詞というよりも、「一ハ 一カラ 一ヲ 一受け取った。」や「一ハ 一ヘ 一ヲ 一渡した。」という言語の文の格関係を背後に有しているとみることが出来る。このみかたをすすめると、借方の1科目と貸方1科目の2科目間の関係が会計領域におけ

る格関係とみることができる。1つの科目に、「一ハ」・「一カラ（へ）」・「一ヲ」という3つの格が隠れているとすると、仕訳文は左右1科目ずつの結合では6つの格の関係が背後にあることになる<sup>3)</sup>。

ここでさらに、〈交換〉が当社とA社の2社間で行われている場合は、「当社ハ」と「A社カラ」あるいは「当社ハ」と「A社へ」の2項が、科目名の背後に隠れているのに対し、為替手形の振り出しのように（仕訳例の⑩）、当社とP社とQ社の3社間で〈交換〉が行われている場合は、「当社ハ」と「P社カラ（へ）」と「Q社へ（カラ）」の3項が科目の背後に隠れていることになる。（格は顕在化しているもののみならず潜在的にも機能している。）そうすると、ある科目とある科目の結びつきは、その科目が有する格と格との関係、あるいはその2科目の〈あいだ〉で機能している格関係により文が成り立っているとみることができる。この場合、1つの科目には少なくとも1つの格があり、多くて4つの格があるとすると、2つの科目の〈あいだ〉で成立する格関係には限りがある（カテゴリー性がある）ことになる。では、格関係の型（文型）を可能性としてみだしてみよう。

会計では、ある取引（出来事）を、金額を主題（トピック）として、左右の位置に1科目ずつ配置することで、仕訳つまりコト分けとしての文が成立する、ということであった。計算に焦点を当てて仕訳をみるなら、借方（左）と貸方（右）は一方が対象物の金額的增加でもう一方が別の対象物の金額的減少を示すことになる。この見方の場合、科目名は対象物を指示する名称となる。しかしここでは、金額をいったん文の外にだし（捨象）、仕訳文は〈交換〉を成り立たせる関係を項と項の関係で表すものとしてみる。

1つの科目のまわりで関与している格の機能には、「一ハ」・「一カラ（へ）」・「一デ」の3項があるということであった。その3項が、「受け取る」（近接性に関与）あるいは「渡す」（離去性に関与）と手を結ぶかたちをとっている。ここで、「一ヲ」は金額を主題化するものとして外したが、これも関

与していることは否定できないから、最終的にこれも入れると4項となる。左右に1科目ずつで文が成立している場合、単純に考えると2科目間がつくる格関係は $4 \times 4 = 16$ のパターンとなる。ここで2社間の関係の場合、一方は当社であり、それは受け取る立場でも渡す立場でも「当社ハ」となるため、2科目間でこの格（「一ハ」）を共有できる。したがって、「方向性」の次元、すなわち「近接性・静止性・離去性」の視点からみた会計記号の格関係の型は $4 \times 3 = 12$ と仮定される。

## 5. おわりに 一格関係と場所

仕訳で用いられている〈負債〉に属する科目、〈純資産〉の属する科目そして〈資産〉に属する科目の一部は、「時間性」を有している。すなわち、「借入金」、「買掛金」、「支払手形」、「資本金」、「貸付金」、「売掛金」、「受取手形」といった科目は、すべて「あとで」受け取ります、あるいは「あとで」渡します、という意味をもっている。そうした時間性を排除するかたちで科目の顛末を追っていくと、最後に残る科目は「現金」となる。このことを逆に言うと、先ほど最高類の概念と述べた現在の5つの概念分類は、「現金」の時間的形態および展開を表現しているように見える。その根底にはやはり金額計算がある。本稿では、企業の利益計算を主目的とした表現システムとしての会計という常識的なみかたに対し、人間の空間知覚図式を探るという立場から、「空間性」あるいは「場所性」ということを意識して考察を進めてきた。

会計がとらえる取引（出来事）の本質は、〈交換〉として表現するということにある。これを仕訳文で表すにあたり、「受け取る」（近接性）の位置に1つの科目を、「渡す」（離去性）の位置に1つの科目を置く。この2つの科目を言語における名詞相当ととらえ、かつ名詞の背後には必ず格があることから、2つの名詞のあいだの関係には、格関係が働いているとみた。つまり仕訳文は格関係をベースに成り立っているとみた。（ただし人間が空間を知覚する図式が格関係に反映されているとみることにかんしてはここでは検証されていない。）ここでは、そ

の格関係の型（言語でいう文型）が、会計記号の場合12個あると仮定した。

考察にあたり、現代の日本語の文と我が国の現行会計上の仕訳文との対応から、格関係についてかんがえた。したがって共時レベルで、他の言語と当該言語を母語とする国の会計上の仕訳文との対応については検討していない。また、我が国の言語と会計記録との対応関係を通時レベルにまで踏み込んでの考察も行っていない。さらに、会計プロパー内に限定して、時代ごとや地域ごとにその取引記録の変遷にまでさかのぼっての格関係の考察（たとえば複式簿記の生成過程と格関係）も行っていない。そうした点で、格関係の考察をとおして人間の認識の基底構造を探求する考察ははじまったばかりである<sup>4)</sup>。

格関係を人間の空間の知覚図式の現れとみる立場から、多言語間での格関係の比較・検討のみならず、言語記号と会計記号などの他記号といった多記号間で格関係を考察することで、そうした研究成果が記号論研究に貢献することが期待される。

## <註>

- 1)「文を主語と述語に分解する方法に対して、文の中核を述語とする文法構造を提示したのは、フランスのスラブ語学者ルシアン・テニエール (Lucien Tesnière) である。……彼のいう述語には動詞述語、形容詞述語、名詞述語が含まれている。」(110頁)  
「文型を論じるに先立ち、テニエール (Tesnière 1966 : 238-9) の主張する「結合価」(valence) という考え方を明らかにしておく必要がある。……動詞には、それが要求する行為項の数によって、無価、1 価、2 価、3 価の 4 種類がある……。」(231頁)
- 2) 本文中の取引例①は、簿記会計の教科書的には「③<資産>の増加—<純資産>の増加」ととらえられるが、現金を「受け取り」、のちに返す約束（としての証券）を「渡した」、とみるのが可能である。取引例②も、現金を「受け取り」、のちに返す約束（としての契約書）を「渡した」、とみることができる。借入金の返済としての取引例⑦は、現金を「渡し」、のちに返す約束（としての契約書）を「受け取り（返してもらい）」また、お金を借りるというサービスを「受け取った」とみる。「受け取った」サービスがなぜ会計で<費用>となるかについては、そのサービスが次への売買につながらないとみて、その評価額を0円とし、受け渡しの金額の差額55円-50円=5円を費用として「支払利息」の名称で表現している、とみる。）取引例③は、商品を「受け取り」、のちに代金を支払う約束を「渡した」ことになるし、取引例④は、商品を「渡し」、のちに代金を受け取る約束を「受け取った」ことになる。以下同様に、「給料」なども会計上の<費用>と決めつけて見ずに、従業員

から労働力というサービスを「受け取った」こととらえ、「受取手数料」も会計上の<収益>と決めつける前に、従業員からの労働力というサービスを他社に「渡した（提供した）」とみる。そのようにみたとで、そのサービスを金額的に評価する中で、<費用>や<収益>といった概念が出てくることになる。

- 3) あるいは、たとえば「当社ハA社から100円ノ商品ヲ受け取った。」ことと「当社ハA社へ100円ノ現金を支払った。」ことのやりとりで、2つの単文に共通する「100円ノ」という金額を表す部分を主題化して文の外にとりだすと（「100円について語ると……」）、勘定科目は残りの3項を背後に有していることになる。また、たとえば「当社ハA社から100円ヲ商品デ受け取った。」ことと「当社ハA社へ100円を現金デ渡した。」ことのやりとりについても、2つの単文に共通する「100円ヲ」という金額を表す部分を主題化して文の外にとりだすと（「100円について語ると……」）、勘定科目は残りの3項を背後に有していることになる。
- 4) 北岡一道氏は「現代の言語学の記述・分析的態度は、古代ギリシャの思弁的な態度より、むしろ古代インドの文法学者の方法に似ている。」として、語彙のなかでも「語形変化」に注目して、英語の人称代名詞を、横に格をとり縦に人称ダイクシスをとる格子様グラフであらわし考察されている。ほかにも前置詞・感動動詞のパラダイムを検討されている。考察の中で北岡氏は、（前置詞なら前置詞の）すべての構成要素の依存関係を格子様グラフに表現することには無理があるが、統計的に中心語を選び、その中心語の語彙的な意味関係を考察して、関係グラフ（パラダイム）を得ることは可能であるとされる。（100頁）  
今後の考察の一つとして「勘定科目」を言語における「語彙」とみて、いくつかのまとまりごとに中心語をえらび、それらの語彙的な意味関係を考察し、完全な関係グラフ（パラダイム）を提出してみたい。

## <引用・参考文献>

- Hjelmslev, Louis (1935), 'La catégorie de cas. Étude de grammaire générale. Première Partie.' *Acta Jutlandica*, 7: 1. i-xii, 1-184. (1937) Deuxième partie. *Acta Jutlandica*, 9: 2. I-vii, 1-78.
- (1943), *Omkering Sprogteoriens Grundlaeggelse*. Copenhagen: Munksgaard. (ルイ・イエラムスレウ, 竹内孝次訳 (1985) 『言語理論の確立をめぐる』 岩波書店.) [English trans. by F.J. Whitfield (1953): *Prolegomena to a Theory of Language*. Madison: University of Wisconsin Press. (Indiana University publications in anthropology and linguistics, Memoir 7 of the *International Journal of American linguistics*, Supplement to Vol.19, No.1, pp.iv+92) (ルイス・イエラムスレウ, 林栄一訳述 (1959) 『世界言語学名著選集第6巻 言語理論序説 [英語学ライブラリー 41]』 ゆまに書房.)
- René Thom, (1972) *Stabilité Structurelle et Morphogénèse: Essai d'une théorie générale des modèles*, W.A. Benjamin, Inc. Advanced Book Program, Reading, Massachusetts. R. トム, 彌永昌吉・宇敷重広 訳 (1980) 『構造安定性と形態形成 (原書第2版)』 岩波書店.
- (1972) *Topologie et Linguistique, Essays on Topology and Related Topics*, Springer.
- (1974) *Modèles mathématiques de la morphogénèse*,



- Union Générale d'Éditions, Paris.
- Tesnière, Lucien. (1966) *Éléments de syntaxe structurale*. [2nd ed.] Paris: Klincksieck.
- 井尻雄士 (1968)『会計測定的基础』東洋経済新報社.
- 泉井久之助 (1967)『言語の構造』紀伊國屋書店.
- 泉谷勝美 (1997)『スンマへの径』森山書店.
- 大西新吾 (2004)「会計記号体系内における『勘定』の意味関係—イェルムスレウの<依存関係>を手がかりとして—」『會計』第166巻第3号, 60-73頁, 森山書店.
- (2013)「複式簿記の基底にある構造的—<意味場>の視点から—」『仁愛女子短期大学研究紀要』第45号, 1-9頁.
- (2014)「文の『かたち』の特殊性と有限性の背景—会計記号論の方途—」『仁愛女子短期大学研究紀要』第46号, 1-10頁.
- (2016)「会計記号の絵画性—道具と操作—」『仁愛女子短期大学研究紀要』第49号, 7-14頁.
- 北岡一道「伝達動詞<say>の間接目的構文」『外国語・外国文学研究』12, 1989年12月, 99-111頁.
- 木村 敏 (1988)『あいだ』弘文堂.
- 国廣哲彌 (1996)『意味論の方法』大修館書店.
- 小泉 保 (2007)『日本語の格と文型—結合価理論にもとづく新提案』大修館書店.
- 佐々木正人 (2015)『新版 アフォーダンス』岩波書店.
- 高寺貞男 (1967)『簿記の一般理論』ミネルヴァ書房.
- 田中茂次 (1995)『会計言語の構造』森山書店.
- 立川健二 (1995a)「言語のなかの主体」『月刊言語』2月号, Vol.24, No.2, 102-107頁, 大修館書店.
- (1995b)「『イェルムスレウ』再入門③—格とはなにか—」『月刊言語』, Vol.24, No.3, 94-99頁, 大修館書店.
- (1996)「デカルトからイェルムスレウへ—特集 デカルト派言語学を超えて—」『月刊言語』, Vol.25, No.4, 20-27頁, 大修館書店.
- 辻 幸夫 (2002)「格と認識の基盤」『月刊言語』第31巻第4号, 36-37頁, 大修館書店.
- 中村雄二郎 (1988)『場所』弘文堂.
- 西田幾多郎 (1987)『西田幾多郎哲学論集 I 場所・私と汝』岩波書店.
- 野崎昭弘 (1974)「トポロジーと言語理論—ルネ・トムの言語理論」『月刊言語』第3巻第5号, 38-45頁, 大修館書店.
- 野口 広 (1973)『カタストロフィー理論—その本質と全貌』講談社.
- M.メルロ=ポンティ, 滝浦静雄, 木田元訳 (1964)『行動の構造』みすず書房.
- , 滝浦静雄訳 (1966)『眼と精神』みすず書房.
- , 竹内芳郎訳 (1967)『知覚の現象学1』みすず書房.
- , 竹内芳郎訳 (1974)『知覚の現象学2』みすず書房.
- , 浦滝静雄訳 (1989)『見えるものと見えないもの』みすず書房.
- 山梨正明 (2004)『ことばの認知空間』開拓社.
- R.トム, E.C.ジーマン, 宇敷重広, 佐和隆光 (1995)『形態と構造—カタストロフの理論—』みすず書房.
- 和辻哲郎 (1991)『風土—人間学的考察—』岩波書店.